図書だより

No.151
2022.12.20
兵庫県立神戸商業高校
図書館
新着図書紹介

図書館からのお知らせ

【冬季休業中　長期貸出】
１２／１９(月)～１／１３(金)
貸出冊数、制限なし
【年内開館】
１２／２３(金)　１２：００まで
３学期は　１／１０(火)から開館と同時に
「**本の福袋**貸出」も始まります！

『ハヤブサ消防団』

池井戸 潤【著】

東京での暮らしに見切りをつけ、亡き父の故郷であるハヤブサ地区に移り住んだミステリ作家の三馬太郎。地元の人の誘いで居酒屋を訪れた太郎は、消防団に勧誘される。迷った末に入団を決意した太郎だったが、やがてのどかな集落でひそかに進行していた事件の存在を知る――。連続放火事件に隠された真実とは?

『向日性植物』　李 屏瑤【著】

台北の女子高に入学した「私」は、先輩の小游と惹かれ合い、戸惑いながらも付き合うことに。しかし....今を生きる少女たちの揺れ動く青春の日々を、繊細かつ誠実に描き出した傑作。

『ファスト教養―１０分で答えが欲しい人たち』

レジー【著】

社交スキルアップのために古典を読み、名著の内容をYouTubeでチェック、財テクや論破術をインフルエンサーから学び「自分の価値」を上げろ――このような「教養論」がビジネスパーソンの間で広まっている。その状況を著者は「ファスト教養」と名付けた。

『高く翔べ―快商・紀伊國屋文左衛門』

吉川 永青【著】

時は元禄。文吉は、幼い頃に巨大な廻船に憧れたことをきっかけに、故郷の紀州で商人を志す。だが許嫁の死をきっかけに、彼は「ひとつの悔いも残さず生きる」ため、身を立てんと江戸を目指す――。蜜柑の商いで故郷を飢饉から救い、莫大な富を得ながらも、一代で店を閉じた謎多き人物、紀伊國屋文左衛門。天才商人の生き様に迫る痛快作。

『ガリバー旅行記』

ジョナサン・スウィフト【著】

1726年にロンドンで刊行された『ガリバー旅行記』は、アイルランド出身の聖職者でジャーナリストのジョナサン・スウィフトが書いた４部構成の諷刺小説です。次々と起きる出来事、たっぷりの諷刺、理屈抜きの面白さ！本書は朝日新聞に好評連載した翻訳の書籍化です。

『震雷の人』　　千葉 ともこ【著】

「世を動かしたい」。唐を揺るがす未曾有の大乱によって大切な人を失った兄妹は、運命に抗うため過酷な戦へと身を投じる。松本清張賞受賞の運命に抗う兄妹のロマン香る大河小説。

『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』

川内 有緒【著】

ニュース｜本屋大賞ノンフィクション本大賞」受賞！「目の見えない人とアートを見る？」タイトルへの素朴な疑問は、驚きとともに解消されます。白鳥建二さんと現代アートや仏像を鑑賞すると、現れるのはこれまで見えていなかった世界。

『日本人が知らない世界の祝祭日事典』

斗鬼 正一【著】

「冥界の神が地上に這い上がるため、火・電気の使用が禁止される日」（インドネシア）や「待ちわびた夏の訪れを祝う日」（スウェーデン）など世界各地の特徴的な祝祭日を取り上げ、その背景（歴史や風俗、文化など）を紹介します。著者の文化人類学の視点に立った比較文化論を盛り込み、機知に富んだ内容の一冊です。

その他の新着図書

此の世の果ての殺人	荒木 あかね	文学
2022 年小論文問題集・分析集　国公立大学／一般　北海道・東北・関東・甲信越	学研	言語
2022 年小論文問題集・分析集　国公立大学／一般　東海・北陸・関西	学研	言語
2022 年小論文問題集・分析集　国公立大学／一般　中国・四国・九州	学研	言語
2022 年小論文問題集・分析集　私立大学／学校推薦型・総合型選抜	学研	言語
呪術廻戦　21／東京第三結界-豪運-	芥見　下々	コミック

ぶらり選書　２学年　　山本先生

『不可能性の時代』

大澤真幸著　岩波新書 2008 年

この本は、日本の戦後史のなかで、人々の現実の捉え方がいかに変遷したのかを描こうとしたものです。著者はその変遷を、私たちの「現実」に意味を与える、「現実」の反対語＝「反現実」のモードの移り変わりを軸に把握しようとしました。

では、この本が主に言っていることを大胆に要約してみます。それは、私たちの現実に意味を見出させるものが、「理想」から「虚構」へ、そして「不可能性」へ移り変わった、ということです。「理想」「虚構」「不可能性」は、全て「現実」の反対語ですが、意味が全く違います。著者は、日本の敗戦後を「理想の時代」（1945~70）、「虚構の時代」（1970~95）、「不可能性の時代」（1995~現在?）と 25 年ごとに分け、その移り変わりを描いています

「理想」は、いずれ現実になると感覚されている「反現実」です。「理想の時代」の人々は、ある価値（例えば「経済が発展した豊かな社会と暮らし」）が、本当に実現すると感覚して生きていました。政治家と民衆、右翼と左翼などの間で「理想」の内容は違ったでしょうが、ともかく、ある「理想」が本当に現実になると思って生きることが可能でした。

しかし「虚構の時代」には、端的に言えば、いくつもの未来の選択肢ができ、そのどれをも絶対視することができなくなりました。唯一無二の選択肢としての「理想」がなくなってしまったのです。例を挙げると、「経済発展」という「理想の時代」の有力な「理想」が、本当に人々を幸福にするのかが疑われ始める一方で、その対案（社会主義、脱成長経済など）も、所詮は選択肢の一つ＝「虚構」にすぎず、新しい「理想」にはなり得ない、といったことです。もはや、唯一の「正解」としての「理想」を想定することはできなくなりました。

次の「不可能性の時代」は難しいのですが、「虚構の時代」に「理想」が曖昧になりすぎたために、次の二つの態度が蔓延した時代だと言っておきましょう。それは、自らが選んだ選択肢のみを認める態度と、どんな選択肢も正当化する態度のことです。

今を生きる人々は、生涯や社会の現実を捉え、少し先の未来を考えることが難しくなっているように見えます。そんな経験がある人は、この本に何かのヒントがあるかもしれません。